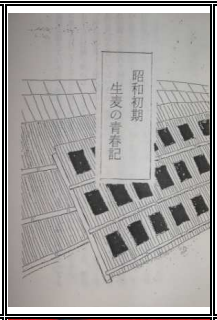
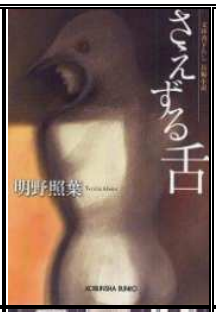
001　健

	読書日 2012年	タイトル	著者 出版社	表紙	コメント	評価
1	0508- 0511	蜩ノ記	葉室麟 祥伝社 1,680円 （地区センター）		主人公は戸田秋谷。前藩主の側室との不義密通の疑惑で幽閉され家譜編纂を命じられる。期限は10年、書き上げた後は切腹することが命じられている。物語の進行役はつまらぬことで刃傷沙汰を起こしながら主人公・戸田秋谷の監視役を拝することで切腹をまぬがれた若き藩士檀野庄三郎。死を間近にしながら公正な眼で家譜の編纂に務める態度、病弱の妻、娘、息子たちとの信頼の絆、農民たちに接する態度を見ていて檀野は当初、戸田に抱いていたイメージを一変する。潔い武士の生き方に清々しい読後感。	
2	0511- 0512	ST 警視庁科学特捜班 緑の調査ファイル	今野敏 講談社ノベルス 798円 （神奈川図書館）		ST色シリーズ4作目。今回は物理担当で絶対音感と人間の聴覚領域を超えた耳を持つ結城翠が活躍。人気ソリスト柚木優子の1億円の名器ストラディバリウスがリハーサル会場で消失。STのメンバーが盗難事件の調査に乗り出す中コンサートマスターが密室殺人の被害者となる。 指揮者辛島と結城翠の聴覚対決が事件の解決に。 超人対決にはそれなりの敵役がいないとね。 クラシックに興味は無いが音に関する薀蓄もありデジタル優位のイメージがある中レコード盤の方が録音機能が優れているというのが意外。	
3	0513- 0515	真相	横山秀夫 双葉文庫 630円 （古200円）		犯人逮捕が事件の終わりではない。そこから始まる意外な真実。通常の事件ものとは違うかなりひねりを加えた5作の短篇集。全般的に暗いイメージがあり読後感は良くない。 「真相」 息子を殺した犯人が10年ぶりに捕まり明かされる真実。 「18番ホール」 都会の生活を捨て出身地の村長選に立候補した男の疑心暗鬼。 「花輪の海」 空手部の死の合宿の真実。 「他人の家」 元犯罪者に差し伸べられた救いの手の裏にあった事情。 「不眠」 リストラされ新薬の人体実験をする男	
4	0516- 0517	八つ花ごよみ	山本一力 新潮文庫 515円		季節の花八つをそれぞれモチーフに江戸の高齢者の恋愛・絆を描いた8編の短篇集。 いつもの骨っぽい作品とちがって落ち着いた人情もの。老境ものなので地味だが自分もそういう年齢に近づいているので味わい深く読めた。 解説者の本音と建前についてのエピソードにも感銘。 「路ばたのききょう」「海辺橋の女郎花」「京橋の小梅」「西應寺の桜」「佃町の菖蒲」「砂村の尾花」「御船橋の紅花 「仲町のひいらぎ」	

5	0518- 0519	上杉かぶき衆	火坂雅志 実業之日本社 1,680円 （地区センター）		かぶき者として名を馳せた前田慶次郎、謙信以来の古老・水原親憲、剣聖の血を引く上泉主水泰綱、新陰流の達人・本多政重、景勝の妻・甲斐御料人。景勝と跡目争いをする三郎景虎、兼続の弟・大国実頼の7人を主人公にその生き様を描く7つの連作短編。全編を貫いているのは謙信亡き後、上杉景勝を盛り立て戦国の世にあって「義」を尊んだ直江兼続の生き様。複雑な人間関係・勢力関係を分かりやすく面白く読ませてくれるので好きな作家だ。	
6	0520- 0523	動機	横山秀夫 文藝春秋 1,650円 （地区センター）		30冊の警察手帳紛失など普通の警察ものが拾わない題材をうまく取り上げ心理描写巧みにラストの意外な結末に持っていくあたりはうまい。 4つの短編で主人公が警察官、元服役囚、新聞記者、裁判官と設定の内容が幅広い。 「動機」「逆転の夏」「ネタ元」「密室の人」	
7	0524- 0525	特殊防諜班 凶星降臨	今野敏 講談社文庫 630円 （古100円）		シリーズ4作目。ナチスを継承する「新人類委員会」の新たな首領の正体は死んだはずのルドルフ・ヘスだったという設定。 敵役の実施部隊はパレスチナ共闘軍と関係を持つ3人の日本人。 対抗するユダヤ諜報員ザミルに絶体絶命の危機が迫る。	
8	0526- 0527	特殊防諜班 諜報潜入	今野敏 講談社文庫 630円 （古200円）		シリーズ1作目で「新人類委員会」に教祖を殺害された雷光教団を継ぐ2代目はひそかに「新人類委員会」と通じユダヤの失われた十支族・芳賀一族の抹殺を目論んでいた。 彼は芳賀一族を守る「山の民」と呼ばれる武闘集団の末裔だったが裏切り教団内で部下の育成を行っていた。同じく「山の民」の末裔で特殊諜報班員の真田は実態を探るため雷光教団に潜入捜査を試みる。	
9	0528- 0529	特殊防諜班 聖域炎上	今野敏 講談社文庫 630円 （古100円）		ユダヤの失われた十支族・芳賀一族（長い困難と流浪の旅の末超人的な能力を獲得）の抹殺に再三、失敗した「新人類委員会」の作戦は芳賀一族の住む聖域である山ごとミサイルによる攻撃をすることだった。 日本のレーダー網をかいくぐりハリアー（垂直離着陸攻撃機）が聖域に接近する。	

10	0530- 0601	特殊防諜班 最終特命	今野敏 講談社文庫 630円 （古150円）		シリーズ7作目にして完結編。 「新人類委員会」の壊滅に成功した特殊防諜班員である真田に下った最終特命は日本国内で「新人類委員会」やテロリストに武器の調達を行っていたブローカーを突き止めることだった。	
11	0602- 0604	警視庁FC	今野敏 毎日新聞社 1,680円 （地区センター）		FC＝フィルムコミッションとは 映画やTVドラマの撮影の便宜を図る部署の事。警官を完全に公務員と捉えて就職した主人公は刑事への昇進などまっぴらごめんと今の職場（総務課）に安住を求めている。降って湧いてできたFCは掛け持ちの雑用仕事。ロケの最中に殺人事件が起き、捜査の仕事まで押し付けられる やる気は無いのに妙に気になる点があって捜査活動に。軽いが最後は少しシリアスに。	
12	0605- 0607	舟を編む	三浦しをん 光文社 1,575円 （古1,000円）		主人公は出版社の中では地味な辞典を編纂する部署の部員たち。本の装幀は彼らが作る辞書「大渡海」の装幀を意識したもの。言葉の海を行く舟（辞書）をイメージ。本作りのこだわり、生き方の反映、ラストの出来上がりのところでは自分が参加したかのごとく喜びを感じた。書店の役割は売れ筋を求めるばかりではないという思いが残った。自分は使い勝手がいいのでコンサイスを使っていたが金田一京助監修のものが欲しかった記憶が。	
13	0608- 0609	無花果の実の なるころに	西條奈加 東京創元社 1,575円 （鶴見図書館）		神楽坂で人気ものだった元芸者の祖母と孫の二人暮らしの家族が主人公。二人の周囲の人間関係にまつわる事件を祖母が亀の甲より年の功で解決する短篇集。料理は全く出来ないが粋なおばあちゃんと料理が得意の良くできた孫のコンビのバランスが良い。	
14	0610- 0611	ビギナーズラック	今野敏 徳間文庫 620円 （古150円）		バイオレンス、傭兵、ジャズ、芸能、趣味、公安もの。若い男の好みそうなジャンルの短編6編。本人が格闘技の指導者もしていることから暴力、格闘シーンの描写がうまい。内容が浅い感じがするが想像力を働かされる部分もある。	

15	0612- 0612	昭和初期 生麦の青春記	旧姓 川端 （鶴見図書館）		両親の出身が生麦なので親戚も多く郷土史に関心があるので読んでみた。 著者は素人。自分が生まれ育った生麦のことが書かれたものが少ないので自分で書いて残しておこうと思ったとのこと。 ワープロで作成したものを閉じた簡易な本。文章は拙いが当時の生麦の様子や暮らしを子供の視点で書かれていて興味深い。	
16	0613- 0614	地獄の札も 賭け放題 ものぐさ次郎酔狂日記	祐光正 文春文庫 610円		公儀隠密として遊び人修行に精を出す三枝恭次郎。金貸し一家殺人事件の下手人を追って奪われた金が出回った賭場に潜入。丁半博打や手本引きの賭け事の入門編的な要素あり。これに絡めて藩の贋金作り、狂気の浪人「不知火」が登場し役者・設定は申し分ないがあまり面白くは無い。	
17	0614- 0616	県庁おもてなし課	有川浩 角川書店 1,680円 （地区センター）		ある日県庁に生まれた新部署「おもてなし課」。若手職員は地方振興企画の手始めに地元出身の人気作家に観光特使を依頼する。お役所仕事と民間感覚の大きなずれにダメ出しする人気作家、何がダメなのか全く気付かない職員。著者の実体験をモデルに「おもてなし課」が変わっていく様を書いたお仕事小説。官僚やT天下り先の所員がTVで説明する一般市民とずれた感覚と同様のグダグダ感とイラつき。	
18	0617- 0619	放課後はミステリーとともに	東川篤哉 実業之日本社 1,575円 （地区センター）		いわゆるライトノベルの学園ミステリー。中高生の頃だったら言葉遊びなどの軽みに面白さを感じたんだろうが。 主人公は僕、霧ヶ峰涼。探偵部の副部長だが部長も部員も出てこない。死人は出ないが霧ヶ峰涼の周辺で事件が多発する。密室の校舎から消えた泥棒、クラスメイトと毒入り珈琲一族、UFO騒動などなど。主人公のキャラにも仕掛けがあるのだがネタばれになるのでここには書かない。	
19	0620- 0622	銀河に口笛	朱川湊人 朝日新聞出版 1,785円 （鶴見図書館）		舞台は昭和４０年代。小学校の３年生の２学期に転校してきた林田ことリンダ。望月ことモッチとその仲間は不思議な力を持つリンダと一緒に探偵団（ウルトラマリン隊）を結成する。猫や盗まれた自転車を探したり、夜中に徘徊する風鈴おじさんの謎解きなど子供らしい冒険。みんなが困っている問題を解決するため不思議な力で手助けするリンダ。 子供の頃の楽しかった日々、切ない思い出、再び転校して行ったリンダの事を40代も後半になったモッチの回想で綴られるSFノスタルジー。	

20	0623- 0626	さえずる舌	明野照美 光文社文庫 660円 （横浜中央図書館）		産業カウンセラーとしてヒーリングスタジオを運営する友部真幌。新たにスタッフに加えた島岡芽衣は知性、美貌すべてにおいて抜きん出た存在であり売上にも貢献、順調に見えた職場だったが次第にスタッフ間に軋轢が生じる。原因を探る真幌は予想もしなかった恐るべき狂気の存在に気づく。ちょっとした言葉、態度で巧みに人の心を操る存在は浦沢直樹の「MONSTAR」を思わせる。	
21	0627- 0628	ビブリア古書堂の事件手帖3 ～栞子さんとの消えない絆～	三上延 メディアワークス文庫 578円		ライトノベルなのが気になるがシリアス度が増して来て良かった。古書店業界の仕組みや古書にまつわる付加価値など巧みに取り入れてミステリー仕立てにしているところが好きな所以。 宮沢賢治「春と修羅」の章は高１の教科書の巻頭詩で習い、好きな詩だったので思いもよらない初版本の存在に驚き！	
22	0628- 0630	ゆげ福 博多探偵事件ファイル	西村健 講談社文庫 630円 （横浜中央図書館）		タイトル通り博多を舞台にした連作短篇集。 博多中洲のラーメン屋台「ゆげ福」の息子・弓削匠はラーメンには目がない私立探偵。探偵になるきっかけとなった父親の失踪の謎を追う中で遭遇する奇妙な事件を人情と自身のラーメン哲学の格言をヒントにこじつけとも言える捜査で事件を解決してゆく。ユーモラスな部分とハードボイルドの雰囲気がうまく合わさっているのが良く博多の街の文化が伝わってくる。	
23	0701- 0703	追想五断章	米澤穂信 集英社文庫 620円		伯父の古書店に働く芳光は可南子という女性の依頼で彼女の父が生前に書いた五篇のリドルストーリー（結末を書かない物語）を探すことになる。彼女のもとにはそれぞれの小説の結末に当たる「最後の一行」が遺されていて小説が発見されるごとに対応する結末が付されてゆく。 作家でもない父が書いた小説の真意、結末を別に残した意味。小説を探す過程で故人が２０年前の未解決事件「アントワープの銃声」（疑惑の銃弾を連想させる）の容疑者と知る。五篇の小説に託した事件の真相。鬱々とした暗い雰囲気を纏った作品だが小説を題材にしているところに興味を持ち購入。	
24	0704- 0707	天使のナイフ	薬丸岳 講談社 1,680円 （地区センター）		第５１回江戸川乱歩賞受賞作（2005年）。 機会があれば乱歩賞受賞作の完全読破を思っていたので借りたもの。 テーマは少年犯罪と少年法。同テーマで書かれた作品は多いが被害者と加害者、第三者の心理を丁寧に掘り下げているところが良い。ストーリーは生後五ヶ月の娘の目の前で妻を殺された夫が主人公で今は一人で娘を育てている。犯人は一三歳の少年三人。四年後犯人の一人が殺され夫に嫌疑がかかり独自に事件の真相を調べはじめるが信じがたい過去の真実が---。	

25	0707- 0708	最初の哲学者	柳広司 幻冬舎 1,470円 （鶴見図書館）		ギリシャ神話や哲学者の話はエピソードとして人から聞く分には面白いが真面目に文献を読むとなると結構しんどい。 この作品にも数々の神話と共に哲学者や為政者の逸話が盛り込まれている。 著者のことだから著者独特の揶揄や見解も組み込まれているのだろうけど元の話の上辺しか知らないので普通に読めてしまい「ソクラテスの妻」以外は作者の狙った面白みがどこにあるのか分からない話が多かった。	
26	0709- 0710	虚夢	薬丸岳 講談社 1,575円 （鶴見図書館）		「天使のナイフ」が面白く読めたので図書館で借りたもの。今回もテーが重く統合失調症の人間が犯した犯罪を裁く刑法39条の問題を問う作品。被害者や加害者の苦悩、社会の対応のあり方など簡単に結論が出せない分真摯な気持ちで読めた。	
27	0710- 0711	ビッグコミック 創刊物語	滝田誠一郎 祥伝社黄金文庫 750円		学校にあがる前から多くの漫画雑誌を読んで育ったが今や定期的に購入するのはビッグコミックとオリジナルだけ。良質の作品を長年掲載し続けていることに敬意を表し拘わりがあるので購入。 以前単行本で読んでいるが加筆されて文庫化ということで買わなくてもよかったがつい買ってしまったもの。	
28	0711- 0713	二重標的	今野敏 ハルキ文庫 714円 （古100円）		今野敏にはシリーズものが多く読みやすい内容なのでつい惰性で手に取ってしまう。これはいわゆる安積警部補・東京ベイエリア分署シリーズの第一弾。警察署の名前や本庁との対立など「踊る大捜査線」の「湾岸署」のモデルになったと言われているシリーズ。1988年の作と考えると警察小説としては新鮮だったと思われる。 開発の進む湾岸エリアにおける事件の対応のため新設されたのがベイエリア分署という設定。	
29	0714- 0716	ホトガラ彦馬	井川香四郎 講談社文庫 630円		明治時代を舞台にした時代劇というのは江戸ものに比べればまだまだ少ない。異文化の流入、野心渦巻く激動の時代という魅力的な背景があるのでもっとこのジャンルの作品が読みたいと思う。主人公は明治時代に実在した写真家上野彦馬。彼が撮影した西郷隆盛の写真を巡り明治政府の暗闘に巻き込まれてゆく。もちろんフィクションだが事実と実在した人物とそのキャラを利用してミステリー仕立てにしているので明治を知るのに良いストーリー。	

30	0717−0719	樽屋三四郎言上帳 男っ晴れ	井川香四郎 文春文庫 680円		ユーモラスな表紙に惹かれて購入。 江戸幕府以来の特権町人「町年寄」樽屋の新当主は父の急死で町年寄を継いだ２３際の熱血漢・三四郎。父には百眼という市井に暮らしながら事件の芽を摘み取るための監視組織を持っておりそれをも引き継ぐことになる。初めは百眼の存在に嫌悪するも時に権力に逆らいながら町の人のために奔走する。そのため他の町年寄立ちからは疎まれる破目に。一冊四話ずつの短編で一作目は登場人物の紹介編といったところ。	
31	0720−0721	樽屋三四郎言上帳 ごうつく長屋	井川香四郎 文春文庫 680円		著者は「銭形平次」「暴れん坊将軍」「八丁堀の七人」などの脚本を手がけているので読みやすい。前巻で嫌っていた百眼のメンバー、敵役の町年寄「奈良屋」と三四郎を慕う奈良屋の娘佳乃（いわゆるジュリエット役）など登場人物のキャラも馴染んできてサクサク読める。 今回の相手は働かずに要求ばかりするモンスター町人。	
32	0722−0724	樽屋三四郎言上帳 まわり舞台	井川香四郎 文春文庫 680円		三四郎の敵役「奈良屋」の娘・佳乃と出かけた芝居見物の最中乗り込んできた暴徒達に芝居小屋が不法占拠される。見物人を人質にした暴徒達の要求とは。	
33	0725−0726	樽屋三四郎言上帳 月を鏡に	井川香四郎 文春文庫 680円		江戸の安寧秩序のためとはいえ町人寄りの三四郎とお上寄りの大岡越前とは立場から施策や刑の裁きでぶつかることもしばしば。 百眼の使い方についても人は変われると思う三四郎と悪人の始末に使うことも厭わない大岡越前と対立する。	
34	0727−0729	看守眼	横山秀夫 新潮社 1,785円 （地区センター）		警察小説であまり取り上げない部署の人間、看守、ルポライター、家裁調停委員、県警HPを管理する警部、新聞記者、県知事の秘書など多彩な顔触れに起きた疑惑、謎、事件。真相に近づいたときにそれぞれが相対する意外な事実、困惑。 「看守眼」 刑事になることを夢みたまま退職した看守。「自伝」 頑固な社長の自伝をゴーストライトすることになり自分の過去と交差することに気づく「口癖」 過去の自分の娘をいじめていた娘の同級生の離婚調停に立会い知った意外な事実。「午前5時の侵入者」 警察HP担当者がHPを荒らされ、取った保身とは。「静かな家」 新聞記事の誤報を載せた元事件記者が巻き込まれた事件。「秘書課の男」 長年仕えてきた知事に疎まれた理由の陰に元秘書の女性の影	

35	0730− 0731	樽屋三四郎言上帳 福むすめ	井川香四郎 文春文庫 680円		シリーズ五作目。貧乏のどん底だった親は双子の姉だけを吉原に売った。長じて巡りあった時盗賊の情婦なっていた姉の心の内は。	
36	0801− 0802	樽屋三四郎言上帳 片棒	井川香四郎 文春文庫 680円		富くじで占領を当てた興奮で心臓が止まった金物屋。換金前の当たりくじを巡ってじ死体を運ぶことになった駕籠かきの二人組は換金前の当たりくじを巡って事件にまきこまれる。 現代の政府の無駄遣いを想起させるような幕府の無駄遣い。	
37	0803− 0804	樽屋三四郎言上帳 ぼうふら人生	井川香四郎 文春文庫 680円 （古350円）		川に油が流れ出て大打撃を受けた漁師たちは町年寄である三四郎のもとに押しかける。 油をばらまいたのは誰なのか。目的は。 その他、「店の鐘を横領した息子」 「命講の未払」、「森林伐採のつけで水害に遭う」など現代とリンクする話をまとめる三四郎。 現実の現代ではなかなか解決しない。	
38	0805− 0807	第三の時効	横山秀夫 集英社 1,785円 （地区センター）		横山秀夫の長編ものは結構映像化されているので割と見ている。小説の方は何となくかったるそうでもっぱら短篇集ばかり読んでいる。 F県警捜査一課の朽木（青鬼）、楠見（冷徹）、村瀬（天才）班がそれぞれの捜査哲学を基に牽制しあい難事件に挑む。 話としてはどれも良くできているがスカッとした気分になれないのが難点。そのうちハッピーな気分になれるものを書いてくれると良いのだが。 「沈黙ノアリバイ」「第三の時効」「囚人のジレンマ」「ペルソナの微笑」「モノクロームの反転」 の6篇。	
39	0808− 0810	ST 警視庁科学特捜班 桃太郎伝説 殺人ファイル	今野敏 講談社文庫 580円 （古100円）		前にも書いたがSTの伝説シリーズは面白くない。桃太郎伝説の知られざる真実は興味を惹いたが作品の面白さにリンクしていないところが残念。今まで読んできたシリーズとして義理と惰性で読んだようなもの。	

40	0811- 0812	虚像の道化 ガリレオ7	東野圭吾 文藝春秋 1,418円		ガリレオシリーズの本道を行く作品四篇。 不可能を可能に変える科学トリックなので謎解きというよりは解決編を読んでああそうですかとうなずくしかないのはいつものとおり。 最近は湯川の放つ学者としての言葉が楽しみ。 10月には「ガリレオ8」が刊行予定。	
41	0813- 0814	新小岩パラダイス	又井健太 角川春樹事務所 1,470円 （地区センター）		奥付を見たら最近の発行だったので借りてきたが主人公の無気力、話のチャラさに100頁ほど読んで久しぶりに挫折。	
42	0815- 0816	ロスジェネの逆襲	池井戸潤 ダイヤモンド社 1,575円		ロスジェネとはバブルが弾けた後、就職氷河期を経験した世代。 「オレたちバブル入行組」「花のバブル入行組」に続く半沢直樹シリーズ3作目。オリンパスの不祥事件をネタに使ったと思われる企業買収のアドバイザー契約を巡り銀行証券部と系列子会社の証券部が対立。子会社にいた半沢は一敗地にまみれるがその裏に陰謀があったことを知りロスジェネ世代のプロパーの部下達と組んで親会社への逆襲を企てる。	
43	0817- 0817	IN★POCKET 8月号 ゆげ福 -腐れ縁-	西村健 講談社 200円		前掲のゆげ福の二冊目が発行されるので記念として収録作品の一つを先行掲載。	
44	0818- 0820	道警刑事 サダの事件簿	菊池貞幸 徳間文庫 660円		道警と言えば裏金疑惑で有名になってしまったがこういう刑事がいれば心強いもの。 「仕事のために仕事をするな」という言葉が響く。 事件にならない、裁判で勝てないという理由で民間の訴えを無視したり、立件しないのは良く聞く話。民事不介入とはいえその気になればやり方はあるというお手本を示してくれている。	

45	0821- 0824	影踏み	横山秀夫 祥伝社文庫 690円 （古100円）		主人公は忍び込みのプロでいわゆる盗人。 彼の頭の中には１９でグレて空き巣を働き母親に無理心中で焼き殺された弟の人格が同居しているという異色の作品。 逮捕された時、侵入した家の夫婦の寝室には妻の夫への殺意が漂っていた。その時の状況が気になっていた彼は出所後、その家のことを独自に調べ始める。 連作短編の形で探偵役を割り当てられているがヒーロー感が無く、盗人になった動機、足を洗わない理由も理解できないところがスッキリしない。	
46	0825- 0828	汝の名	明野照葉 中公文庫 760円 （古200円）		「イヤミス」という言葉があるとは知らなかった。「後味の悪い」イヤな気分になるミステリー作品を指す言葉とのこと。 昔から怖いもの見たさという言葉があるけれどホラーがほぼ行き着くところまで行ってしまったので生理的や心理的に追い込められる作品にシフトしているのかも知れない。 女の業と嫉妬心が生み出す残酷さが一線を越える後味の悪い作品になっていて読みたくはないジャンルの作品。	
47	0829- 0831	船手奉行うたかた日記 いのちの絆	井川香四郎 幻冬舎文庫 680円 （古200円）		ここのところはまっている井川香四郎。 今回は船手奉行シリーズの一作目。 TVなどでは船手奉行も町奉行も区別がはっきりしないが実際は海につながっている分、独自の捜査権や検問システムを構築していたことなどよくわかって面白い。	